第四十三回新田次郎文学賞決定発表

正賞及び副賞百万円

公益財団法人 新田次郎記念会
理事長　藤原正彦

受賞作

『ドードー鳥と孤独鳥』（国書刊行会）

川端裕人

選考委員　熊谷達也　澤田瞳子　諸田玲子

第四十三回新田次郎文学賞は、四月右記のように決定致しました。この賞は、故新田次郎氏の遺志により設定されたもので、氏の印税を基金とし、左記の規定によって年一回授賞されます。

一、前年一年間（第四十三回は令和五年一月―令和五年十二月）に初めて刊行された作品。
一、小説、伝記、エッセイ、長短篇等の形式の如何を問わない。
一、歴史、現代にわたり、ノンフィクション文学、または自然界（山岳、海洋、動植物等）に材をとったもの。
一、以上の条件を充たしたその年の最もすぐれた作品を選定する。

（尚、本賞では、候補作の発表は致しません）

選評

小説とノンフィクションの堂々めぐり

諸田玲子

これまで遭遇したことのない、ふしぎな味わいの〈小説〉である。

小説、と書いて少々とまどってしまうのは、いわゆる家族小説でも青春小説でも恋愛小説でもなく、ホラーでもミステリーでもなく、むろんSFでも歴史小説でもないからだ。あえていえば科学小説……？

タマキとケイナ、幼なじみの少女たちが、各々をドードー鳥と孤独鳥になぞらえて絶滅動物に空想をめぐらせる第一章が秀逸だ。百々谷（どどたに）の自然描写が見事で、これからなにが始まるかと胸がおどる。ところが、そのあと長いあいだ二人は巡り合わない。科学記者になったタマキが絶滅したドードー鳥に辿り着こうとあがく〈堂々めぐり〉が、日記風に、あるいは百科事典をめくるように、絵や写真、文献の記述をふんだんに挿入しながらこれでもかとつづいてゆく。そしてゲノム研究者となったケイナとは再会と疎遠の時期を経て、再び百々谷で暮らすことになる。ゲノム編集されたカンムリバトのヒナと共に……。

興味をそそられる冒頭やSFめいた最終話と、中盤の――それはそれで楽しく、十分に読み応えがあるのだけれど――絶滅動物に関する知識の羅列との乖離を、どう解釈すればよいのか。選考会ではその一点に議論が百出した。全員一致で到達した結論は〈だからこそ本賞に値する〉というものだった。

まちがいなく労作である。著者の川端裕人氏にしか書けない壮大な世界だ。そもそも小説をジャンル分けするのは無意味だし、小説という概念すら、もはや変貌自在になりつつある。その意味からすれば、本著は画期的な〈小説〉といえる。

絶滅動物をゲノムで再生することが、その種を生き返らせることになるのか。絶滅やゲノム技術は、わたしたちに新しい景色を見せてくれるのだろうか。

喫緊の奥深い問題を随所にちりばめた本著が受賞作となったことを、心から喜びたい。

受賞の言葉

新しい景観を見つける

川端裕人

はじめて小説を出版してから26年になります。

その間、「新しい景観」を見つけて描出したい、という思いにとらわれてきました。宇宙開発、疫学、古生物、動物、気象学といった自然科学寄りの題材から、子育て、教育といった日常的な題材まで、知られざる景観とその中にいる人たちへの関心が創作の根っこでした。

今回の受賞作『ドードー鳥と孤独鳥』も、同じ欲望から発したものです。「絶滅」というすでに「終わった」はずの現象が、実はわたしたちの過去だけでなく、現在や未来について饒舌に語りかけてくること、そして、いやがおうでも新しい景観を見せることに気づいたとき、もう頭の中で物語が始まっていました。

メルヴィルの『白鯨』のように博物書の要素を含み、「先祖返り」的な作品になったと思っています。日本の文芸の世界の辺境で、人目につかない単独峰にひっそり登った気分でした。しかし、この孤峰も、新田次郎氏の「遺志」の掌の中だったのですね！　受賞の連絡を受けて大いに驚くとともに、感謝と喜びの念が湧き上がってきました。新たな景観に出会う旅を続けるための励ましととらえ、さらに足を前に進めることといたします。

1964年兵庫県明石市生まれ、千葉県千葉市育ち。東京大学教養学部卒。1995年にノンフィクション『クジラを捕って、考えた』、1998年に『夏のロケット』で小説家デビュー。2018年には『我々はなぜ我々だけなのか――アジアから消えた多様な「人類」たち』で科学ジャーナリスト賞と講談社科学出版賞を受賞した。